初穂

日本人と聖書　第5回

禁教下の受洗者たち

- 最初のクリスチャンは矢野元隆（1864年）
- 二人目は荘村助右衛門（1866年）
  - 熊本藩の中位の武士。藩士の監督格で長崎に赴き、フルベッキやウィリアムズに接して
- 粟津高明[膳所藩士]と鈴木貫一[彦根藩士]、清水宮内[僧侶]（1868年）
- 小川義綏（よしやす）、鈴木甲次郎[英語学生]、鳥屋だい[商家の隠居]。二川一騰と仁村守三（翌年）[真宗僧侶]

入信の動機

- 宣教師の人柄
- あたらなる主人（殿様）
  - 「天にある神様をば親として考を尽くせ、十字架に磔られし救い主おば己の殿様としてご主人として忠義を尽くせよ」（本多庸一）
- 宣教師たちの熱心な祈り
  - 小崎弘道は洋学校教師ジェーンスの熱涙溢れて祈る姿に感動した

受洗に際して

- 禁教下での入信・受洗は死を意味した
- 宣教師も洗礼を勧めなかった
  - 「政府は諸君を逮捕するやもしれない、その時には新名に縛に就くことを望む。国法によって諸君を罰そうとするなら、たとえ死刑に処せられようとも、これを受けてこそ真にキリスト教との名に恥じないものである。」
- 明治4年までに20人が洗礼を受けた

迫害

- 清水宮内・二川一騰（僧侶）
  - 明治2年に投獄され、明治5年に釈放された
  - 捕縛の前日に二川と結婚した妻は、二川が既に死刑に処せれられたと思い、墓碑を建てて他家へ再嫁していた
- 市川栄之助（夫妻）
  - 明治4年に神戸で捕縛され、翌年京都二條の獄舎で病死した

集会（教会）の始まり

- 1867年8月第1日曜日宣教師バラの自宅で
  - バラから洗礼受けた者ら十数人
  - 老齢の婦人（島屋だいか）や大工の親方も
- 1872年、正月「初週祈祷会」開催
  - バラの英語学校の生徒らの希望により
  - その後も夕4時から連日開催
  - 本多庸一・奥野昌綱・井深梶之助・植村正久など相次いで受洗
- 「日本基督公会」設立

イザヤ書 32章15節

「されど遂に霊（みたま）うえよりわれらにそそぎて、荒野（あれの）はよき田（はた）となり、よき田（はた）は林のごとく見ゆるとき来たらん。」
（文語訳／英語だった？）

「ついに、我々の上に／霊が高い天から注がれる。荒れ野は園となり／園は森と見なされる。」（新共同訳）

高札撤去（キリスト教解禁）

- 特命全権大使・岩倉具視
  - 不平等条約改正のため1871年欧米に派遣
  - 行く先々の国々で、キリスト教徒迫害に対する官民の抗議と世論の沸騰とに直面し、肝心な条約改正の交渉は少しも進捗しなかった
  - 信教を自由にすべき旨、政府に打電
- 1873年（明治6年）2月21日、「切支丹禁制の高札」は撤去された